



都連青年部通信

部落解放同盟東京都連合会 青年部
2018年 1月号

〒111-0024 台東区今戸 2-8-5
TEL 03-3874-7311

雇用相談のお知らせ

◆日時:毎月第3水曜日
13:30~(3.8月は別日程)

◆場所:東京都人権プラザ
(台東区橋場 1-1-6)

◆内容:国と都の専任の担当者が仕事探しの手伝いをします。

- ①就職や仕事探しのサポート
- ②職業訓練や非正規から正規へのキャリア・アップの相談
- ③失業・求職時の居住や生活費などの生活相談・支援

◆費用:無料

◆問い合わせは各支部へ!

12月 取り組み

- ◆12月7日(木)18:30~ 場所:墨田区社会福祉会館内
『熱と光 すみだフェスタ 2017』けっしてあきらめない闘い~ハンセン病を生きて~
- ◆12月8日(金)18:00~ 場所:東京解放会館 3F 『青年部 学習会&忘年会』
- ◆12月15日(金)14:00~ 場所:東京地裁 103号法廷
『福島原発被ばく労災 あらかぶ裁判 第5回口頭弁論』
- ◆12月17日(日)10:30~場所:中野商工会館『人権ネットワーク東京 第2回座談会』
- ◆12月25日(月)11:00~ 東京地方裁判所 103号法廷
『全国部落調査』復刻版出版差し止め裁判 第7回口頭弁論』

今後の予定

- ◆1月9日(火)18:00~ 場所:日暮里ホテルラングウッド 『都連旗開き』
- ◆1月28日(日)10:30~ 場所:スマイル中野 『人権ネットワーク東京 第3回座談会』
テーマ:ジェンダー、セクシュアリティ、「家族」(戸籍)、女性問題/運動

同封のチラシ等を参照してください。

青年部学習交流会

1月9日(金) 都連旗開き終了後、同会場で会議します



忘年会!焼肉パーティー!
美味しく楽しく盛り上がりました!
2018年も良い年に
ないますように!!

水平社運動 ~自主・糾弾・生活~ 都連青年部学習会のポイント

- ・1871年 「解放令」 身分制度が解体されるも現実には生活のあらゆる面で厳しい部落差別が続く
- ・20世紀 工業化が進み労働組合や農業組合、女性解放など、民衆の権利拡大を求めるの動きが起こる
- ・1922年 「水平社」創立 当事者が自主的に部落解放、要求実現のために訴え立ち上がる

〈水平社創立前の考え〉差別の原因は文明開化に後れをとる我々、部落民にある。

差別を無くすには、社会へ同化しなければならない(部落改善運動・融和運動)

〈水平社宣言・綱領〉職業の自由を獲得し部落の経済的な基盤を確立すること。

また、一切の差別のない理想の社会を目指すことを明らかにする。

〈水平社宣言・決議〉侮辱の意志をこめて「特殊部落民」などの言葉を使った場合には厳しく糾弾する

〈糾弾闘争の基本思想〉◇いかなる人権も差別への告発なしに生まれることはなかった。

◇差別を憎んで人を憎まず=差別の誤りを糾(ただ)しつつ、人間としてよみがえさせる。

〈『差別性』の基準〉◇差別語を使用したからでなく差別的意図があるかないか

◇差別的意図が無くても、その言動により部落差別が拡大・助長された場合

〈糾弾闘争〉◇事実確認(差別性を明確)◇再発防止策(原因と背景、課題と政策を明確)

◇自らも解放(共に闘う)

〈部落委員会活動〉差別事件の背景である劣悪な実態の改善要求(地域に密着した生活擁護闘争)

〈水平社の終わり〉1940年 16回大会を最後に水平社法的に自然消滅(1942年) 1945年終戦
平和の下でないと「差別のない社会」は実現しない 4年後水平社創立から100年。その時部落差別は?

共通点・相違点を通して相互理解を深める

人権ネットワーク東京&反差別・人権（青年）交流会 ～第2回座談会～

人権ネットワーク東京&反差別・人権青年交流会は第2回座談会を12月17日に開催しました。

解放出版社の「東京で生きるマイノリティの声を伝える」(仮称)の企画出版に向け、第2回目のテーマ「人種/民族/部落/問題」の課題について討論しました。プログラムは3部構成で、第1部は、部落解放同盟東京都連合会、続いてチャシ・アン・カラの会、在日本朝鮮人東京人権協会、沖縄のたたかいと連帯する東京南部の会の代表が登壇し5つの柱にそって思いを伝えました。2部、3部では参加者も交えての討論をしました。

マイノリティの立場でも、歴史・背景や抱えている問題は違います。けれど差別を許さない姿勢や、伝統や文化、歴史を大切に思う気持ち、教育・啓発の重要性への認識は、共通点が多く見られ、第2回目も座談会の目的と意図である複合差別の可視化・共通課題の可視化を通し相互理解が深まりました。

最後に登壇者から、「私たちが頑張っている姿を見てもらえれば分かってもらえる」「マイノリティをかわいそうな存在と思うのではなく、なぜある側面ではマジョリティであるのか考え、自分のマジョリティ性に気づく事が重要」「マイノリティの連帯は大切だからこそ、お互いの立場を認識しながら緊張感を持ちながら、手を繋いでいくことが大切」などの意見が出ました。

～第3回 座談会～

日時:1月28日(日)10:30～ 場所:スマイル中野
 テーマ:ジェンダー・セクシュアリティ、「家族」(戸籍)、女性問題/運動

5つの柱

- 1 プロフィール 2 運動に入ったきっかけ、体験談等
- 3 闘い等の切実な経験等
- 4 家族やコミュニティの反応
- 5 未組織当事者へのメッセージ

在日本朝鮮人東京人権協会 U. K

在日朝鮮人3世として岡山県生まれ、小学校から大学院までを朝鮮学校で過ごしました。中学生の時、日本人に制服のチマチョゴリへ嫌悪感をぶつけられ、在日朝鮮人であることを考えるようになりました。大学時代には「慰安婦問題」と出会い、歴史を学ぶきっかけになりました。国連での呼びかけ等にも参加し、抑圧されている人々の声を世界に届けたいと思い活動しています。朝鮮高校無償化、ハイトスピーチも深刻ですし、複合差別も重要です。学習会を開くなどの取り組みも行なっています。

チャシ・アン・カラの会 T. U

北海道釧路市から10歳の時に東京に来ました。祖母と母は清掃業をしながら育ててくれました。私自身も自分で稼ぎたいとの思いで早くから働いてました。祖母や母は人権、権利を取り戻す為、都庁への陳情、デモや国会座り込みに参加してました。祖母の民族の誇り権利回復への切実な思いを受け止め文化啓発に取り組んでいます。知識や伝統を伝承してくのは大切なことです。また、北海道を離れて暮らすアイヌも、アイヌはアイヌなのです。「チャシ・アン・カラ(私たちの岩)」を造ってみたいです。

沖縄のたたかいと連帯する東京南部の会 H. A

1966年にパスポートを持って沖縄から日本へ大学留学のため来ました。母は野菜の行商しながら育ててくれていました。当時は、平和憲法のある日本への復帰運動が盛んでした。日本に復帰したら基地は縮小されなくなると思っていました。実際は米軍占領時とほぼ変わらず、沖縄の民意を踏みにじり新基地の建設を強行し米軍の被害に苦しめられ続けています。一坪運動に参加はしていましたが解放運動や組合で、沖縄の運動と離れていた事もありました。けれど何かやらねばという危機感があり「沖縄だけに押し付けるな!」と活動をしています。日本により文化は奪われてきましたが、今沖縄は誇りを持ち方言や文化を大切にしています。

部落解放同盟東京都連青年部 M. K

江東区生まれ被差別部落の地区外で育ちました。両親は生まれてすぐに離婚し、母と姉、兄、私の4人家族でした。集会や会議に幼い頃から連れられ解放運動は家族の中心にありました。全国青年集会への参加をきっかけに青年部活動に参加するようになりました。自分自身に向けられたもので無かったですが差別発言を聞き部落差別が現存している事を実感し、自分や家族が差別の標的になるのかもという恐怖や不安を抱えています。差別を無くしていくためには教育・啓発や不安を抱える部落青年たちの居場所が大切だと信じ取り組みを行なっています。



けっしてあきらめない闘い ～ハンセン病を生きて～ “熱と光” すみだフェスタ 2017

石山さん、早智子さんも
応援に来てくれました



石山春平さん・絹子さん

あらゆる差別の撤廃を願う市民の交流の場として「人の世に熱あれ、人間に光あれ」の願いを込めて“熱と光”すみだフェスタが行われました。

ゲストの石山春平さんは1936年静岡県で生まれ小6でハンセン病と診断され、差別的な隔離政策により学校は強制退学させられ16歳まで家庭内隔離生活をおくりました。家族以外と話せない生活で孤独から自殺まで考えましたが、死んだと思えば頑張れる。差別する人を長生きして見返してやると決意しました。そして療養所へ入所し、そこで絹江さんとの出会い、結婚を機に療養所を出て生活を始めました。子育てをしながら大変苦労をされたお二人ですが、話はユーモアに溢れ、会場を明るく優しくしてくれました。墨田支部のアットホームさも加わり元気の貰える素敵な会でした。

12月15日、東京地裁103大法廷にて『福島原発被ばく労災 あらかぶさん裁判 第5回口頭弁論』が行われ、多くの支援者が駆けつけました。裁判では、東京電力福島原発事故収束作業や九州電力玄海原発の定期検査に従事し、急性骨髄性白血病を発症「死ぬかもしれない」恐怖から、うつ病も発症したあらかぶさんは、東電・九電が責任を認めるように訴えています。

今回は、提出済み準備書面への裁判官からの質問を受け、被ばく労災の第一人者についての補足した準備書面の説明や、東電が提出した準備書面への質問が弁護団から行われました。裁判官は、これまでの裁判の経緯や土台認識を共有し、疑問点の解消を図ることを求めました。次回は2月22日(木)。裁判官に注目しているぞ！とアピールしましょう。

裁判終了後は報告集会が行われました。

福島原発被ばく労災 あらかぶさん裁判 ～第5回口頭弁論～



報告集会にて弁護団より裁判の説明と報告

「全国部落調査」復刻版出版差し止め裁判

第7回口頭弁論

報告集会の様子



報告集会にて弁護団より裁判の説明と経過報告

全国部落調査復刻版出版差し止め裁判の第7回口頭弁論が12月25日、東京地裁103法廷にて行われました。今回弁護団は、準備書面6の補足説明と併せて、原告の陳述書の取り扱いについてインターネットへ載せる等の行為をしないように求めるも、被告は明言を避けました。

裁判終了後に行なわれた報告集会では、弁護団より提出した準備書面について説明が行われました。

山本弁護士からは「ネット社会における差別の特質」について現代のインターネット社会で差別が起きた際の、拡散・連鎖・再生産などの危険性について訴えました。

中井弁護士は前回の準備書面5で示したネットの電話帳事件の補充「2番目の違法性に関する主張の補充」がされました。

河村弁護士からは、部落差別など人権侵害による個人情報の流出は、損害がいかに大きく、他の裁判事例でも主張が認められている事を訴えました。

今後は残りの陳述書を順次提出し、原告や専門家等の証人尋問を申請していきます。

次回の裁判日程は3月12日14時からです。

高校生の熱意により史実の解明がされ 秘密にされた登戸研究所が戦争を伝える資料館へ

清掃・人権交流会 登戸研究所資料館フィールドワーク

登戸研究所資料館フィールドワークが12月3日(土)、清掃・人権交流会が主催で行なわれ、都連青年部からも参加をさせていただきました。

登戸研究所は、旧日本陸軍が秘密戦(防諜・諜報・謀略・宣伝)の兵器・資材を研究・開発するために設置した研究所で、一般にはその存在は秘密にされていました。1937年に「陸軍科学研究登戸実験場」として開設された研究所は、戦況の流れで名前も規模も変化し、最盛期の1944年には、敷地11万坪に100棟の建物、職員が総勢1000名に達する大規模な研究所でした。それを支えた、多くの雇員・工員は近隣に住む地域の人たちで、組織全体の約8割を占めていました。戦局が悪化し、研究所の主たる機能は長野県伊那地方に分散・疎開し、そこで敗戦をむかえます。

1980年代、長野と川崎の高校が「平和ゼミナール」で地域の戦争と歴史に取り組みました。高校生らのひたむきな調査活動は、戦後長い間口を閉ざしていた元関係者の心をひらき、歴史家もなしえなかった史実の解明を実現しました。



登戸研究所資料館の4つの特徴

- ①旧日本軍の研究施設をそのまま保存・活用した資料館で貴重な戦争遺跡です。
- ②歴史に記録されない秘密戦に焦点をあてた、日本で唯一の資料館です。
- ③登戸研究所全貌、各科の活動の概要を、実証的かつ視覚的に展示した唯一の常設資料館です。
- ④登戸研究所の史実発掘過程を展示の対象にしています。



研究所の全体像を展示した 第一展示室

研究所が設置された歴史的な背景と目的、立地条件、組織の概要、運営体制、他機関との関係、そして戦争の進展とともに研究所の規模と役割が次第に変化していく過程を中心に紹介しています。



アメリカ本土に直接攻撃をした 風船爆弾を中心に解説 第二展示室

第一科を中心に行われた風船爆弾の開発要請から完成まで、そしてウィルス兵器を搭載する予定であったことや飛行の様子などについて展示しています。当時、材料の蒞藪が出回らなくなったそうです。



生物兵器・毒物・スパイ機材など研究 開発を行った第二科を紹介 第三展示室

第二科は、日本陸軍が水面下で行なっていた秘密兵器・資材の開発という点で支え、諜報・謀略活動に関して、七三一部隊や中野学校・特務機関・憲兵隊などと関係が深かった部署です。七三一部隊では、登戸研究所で開発されたものを人体実験していました。



偽札製造を行った第三科を紹介 第四展示室

第三科は高度な印技術を駆使して偽札や偽造パスポートの製造を行い、とりわけ中国の蒋介石政権の紙幣の偽造に力を注いでいました。偽札の偽造と散布それが戦局に与えた影響について見ていきます。精密な偽札を作るため、高度な技術が求められ印刷関係機関や企業に協力要請がなされました。



戦争末期と資料館開館までの経緯を紹介 第五展示室

日本軍の戦局の悪化にともなう本土決戦体制の構築の流れと、そのひとつであった登戸研究所の移転の様子を展示しています。

また、敗戦・占領政策と研究所の関係や研究所が資料館として生まれ変わる過程、高校生と元所員との交流を中心に紹介しています。



明治大学平和教育登戸研究所資料館 フィールドワークに参加して……

職員の丁寧な説明があり、大変分りやすかったです。民間の研究者が、戦争と置かれた環境により、捕虜を使った毒ガスの実験を最後には、研究成果を確認するためとして、殺人に罪悪感や恐怖を持たなくなったことに、戦争は人を殺人者にするのだと改めて考えさせられました。戦後、所員らが家族にも言えず、一人抱え込んで苦しんでいた事は、秘密の重さ、罪の重さに触れた気がしました。